

ごん狐

動画リンク:

<https://youtu.be/m-8LhUVUzG8>

今回は、日本の昔ばなし「ごん狐」を学びながら日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部・2部・3部に分かれ3段階のスピードで聴くことができます。
1部→2部→3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。
学習にお役立てください。

はじめに

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。
語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。
作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための昔ばなしや童話のことです。
「おとぎ話」の中には、語り継がれてきた「昔ばなし」も創作である「童話」も含まれます。

「ごん狐」は とても有名な日本の童話です。
それでは「ごん狐」の お話を始めます。

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村の近くの、中山というところに小さなお城があって、
中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。

ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだのいっぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。

そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。

畑へ入って芋をほりちらしたり、菜種がらの、ほしてある野へ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりにとっていたり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨が降り続いたその間、ごんは、外へも出られなくて 穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして 穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、百舌鳥の音がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤まで出て来ました。あたりのすすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。

川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どっと増していました。

ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄色くにごった水に横だおしになって、もまれています。

ごんは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。
ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。

ごんは、見つからないように、そうっと草の深いところへ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。「兵十だな」と、ごんは思いました。

兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶっていました。

はちまきをした顔の横っちょうに、丸い萩の葉が一枚、大きな黒子みたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一番後ろの袋のようになったところを、水の中からもちあげました。

その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどが、ごちゃごちゃ入っていましたが、ところどころ、白いものがきらきら光っています。

それは、太いうなぎの腹や大きなきすの腹でした。

兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすをごみといっしょにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもって川から上がりびくを土手においといて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中から飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。

ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぽんぽんなげこみました。

どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

一番しまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。

ごんはじれったくなくて、頭をびくの中につこんで、うなぎの頭を口にくわえました。

うなぎは、キュッと行ってごんの首へまきつきました。

そのとたんに兵十が、向うから、「うわあ、ぬすと狐め！」とどなりたてました。

ごんは、びっくりして飛び上がりました。うなぎをふりすてて逃げようとしたのですが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれません。

ごんは、そのまま横とびに飛び出して、一生懸命に逃げていきました。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえってみましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、穴の外の草の葉の上のにせておきました。

十日ほどたって、ごんが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかりますと、そのの、いちじくの木のかげで、弥助の家内が、おはぐろをつけていました。

鍛冶屋の新兵衛の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。

ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな」と思いました。

「何なんだろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますといつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。

その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人が集まっていました。

よそいきの着物を着て、腰に手拭いをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えていました。

お午がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、穴地蔵さんのかげにかくれていました。

いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦が光っています。

墓地には、ひがん花が、赤い布きれのように咲き続けていました。

と、村の方から、カーン、カーン、と鐘が鳴って来ました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。

葬列は墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんは、のびあがってみました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌をささげています。

いつもは、赤いさつま芋みたいな元気の良い顔が、今日は何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおっ母だ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおっ母は、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。

それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかった。

ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

兵十が、赤い井戸のところで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっ母と二人きりで、貧しい暮らしをしていたもので、おっ母が死んでしまっちは、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしのやすうりだあい。いきのいいいわしだあい」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走って行きました。

と、弥助のおかみさんが、裏戸口から、「いわしをおくれ。」と言いました。

いわし売りは、いわしのかごをつんだ車を道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを 両手でつかんで、弥助の家の中へもって入りました。

ごんはそのすきに、かごの中から、五、六匹のいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。

そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向ってかけもどりました。

途中の坂の上でふりかえてみますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗を どっさりひろって、それをかかえて、兵十の家へ行きました。

裏口からのぞいてみますと、兵十は、午飯(ひるめし)を食べかけて、茶碗をもったまま、ぼんやりと考えこんでいました。

変なことに、兵十のほっぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだろうと、ごんが思っていると、兵十がひとりごとを言いました。

「一体誰が、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人と思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこう思いながら、そっと物置の方へまわってその入口に、栗を置いて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって来てやりました。

その次の日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三本もっていきました。

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。

中山さまのお城の下を通過して少しくと、細い道の向うから、誰か来るようです。

話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片がわに隠れて、じっとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助というお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十がいました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」

「何が？」

「おつ母が死んでからは、誰だか知らんが、おれに栗やまつたけなんかを、毎日毎日くれるんだよ」

「ふうん、誰が？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、置いていくんだ」

ごんは、二人のあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、明日見に来いよ。その栗を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなあ」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひょいと、後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなって立ち止まりました。

加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさと歩きました。

吉兵衛というお百姓の家まで来ると、二人はそこへ入っていきました。ポンポンポンポンと木魚の音がしています。

窓の障子にあかりがさしていて、大きな坊主頭がうつって動いていました。

ごんは、「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。

しばらくすると、また三人ほど、人がつれだつての吉兵衛の家へ入っていきました。お経を読む声が聞こえてきました。

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。

兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十の影法師をふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ。

神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思って、いろんなものを恵んで下さるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだと。だから、毎日、神さまにお礼を言うがいいよ」

「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。

「おれが、栗やまつたけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神さまにお礼を言うんじゃあ、おれは、引き合わないなあ」

そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。

兵十は物置で縄をなっていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へ入ったではありませんか。

こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は立ち上がって、納屋にかけてある火縄銃をとって、火薬をつめました。

そして、足音をしのばせて近寄って、今戸口を出ようとするごんをドンと、うちました。

ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。

家の中を見ると、土間に栗が、かためて置いてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落としました。青い煙がまだ筒口から細く出ていました。

日本昔ばなし「ごん狐」はいかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。



Japanese-listening-SUSHI

